

Minami Kyushu University Syllabus

シラバス年度	2026年度	開講キャンパス		都城キャンパス		開設学科		環境園芸学科		
科目名称	自然体験実習						授業形態		実習	
科目コード	710067	単位数	2単位	配当学年	3	実務経験教員		○	アクティブ ラーニング	○
担当教員名	伊志嶺 朝紀、日高 英二								ICT活 用	
授業概要	専門課程である環境園芸は、広く自然や人に関わる職種である。本講義の「自然体験活動実習」では、「人と人、人と自然とが共生したよりよい社会づくり」の必要性を学びます。学びの要素として、チームワーク、リーダーシップ、コミュニケーションスキル、課題抽出、課題解決、社会的責任、自己管理能力などが挙げられます。 主な内容として、協調性を高めるコミュニケーションプログラム、五感を使った自然体験プログラムの実践、フィールドワーク、環境教育プログラムを実践します。 また、国際目標である「SDGs＝持続可能な開発目標」は講義内容として様々な含まれており、これらのことを学ぶことで、習得し、人間力を高め、社会人として、また専門課程である環境園芸の分野にも活かされる人材育成を目指します。 ※人間力：多様な人々と友好的なコミュニケーションを望み、自然共生社会の一員として、自ら考え、良き判断をもとに主体的に行動できる力。 【実務経験】一般社団法人アイ・オー・イー勤務（設立1986年）勤務年数30年 自然体験教育、野外教育、環境教育を取り入れた、青少年の体験活動の企画、運営、指導を行っています。 熊本を拠点とし、福岡、北海道、沖縄、屋久島、種子島など、地域ならではの自然や文化の体験学習を取り入れております。 また、省庁が推進する地域づくり事業、観光事業などにおいても自然体験活動を活かしたプログラム開発、安全管理などの連携事業も行っております。 そのような経験に基づく根拠、事例などを講義内容に取り入れ、より厚み、深みのある講義を目指します。									
関連する科目										
授業の進め方 と方法	自然体験活動実習における指導手法は、「アクティブラーニング」のラーニングピラミッドに対応した学習指導法で行います。以下のよう手順で進めます。 ・座学を中心とした実習内容の理解。 ・テキストによる基礎的理解。 ・見て・聞いて・触れて体験をととした理解。 ・体験した内容を個人で考察する。 ・個人からグループへ共有する。 ・グループワークによるデモンストレーション発表へ向けた内容の構築をする。 ・デモンストレーションは、他者への理解を深めるための技術を磨く。 ・デモンストレーション後のふりかえりは、個人、グループ、他者からの意見を共有し個人の理解も深める。 デモンストレーションの構築におけるグループワークは、以下の「PDCAサイクル」により主体性を持って取組めるように進行します。 【PDCAサイクル】矢印はP→D→C→A→P…と繰り返される。更には継続することでスパイラルアップ（回転しながら上昇＝改善しながら改良・向上する）となる。 →Plan：計画（目標を達成するまでの計画作成） →Do：実行（計画を実行する。評価・分析（Check）できるように活動内容を記録し、内容や課題を解決する） →Check：評価（計画どおりに進んでいるか、目標の達成を評価する。また結果の達成、未達成を客観的に見て他者の評価なども交える。 →Action：改善（評価を見ながら、良かった点は継続的し、悪かった点はどのように改善するべきかを考える。この計画を続けるか、修正するか、中止するかも考慮し、改善すべき点を次のPlanに落とし込み、PDCAサイクルへつなげていきます。）									
授業計画 【第1回】	第1回 対象となる参加者を知る（アイスブレイキング法による雰囲気づくり） ●アイスブレイキングについて（配布資料） ●実技体験（4つの窓、コミュニケーションゲーム、レクゲーム、その他） ●ふりかえり									
授業計画 【第2回】	第2回 協調性と信頼関係の必要性（手法：イニシアティブゲーム） ●イニシアティブゲーム（協調ゲーム）の体験 ・アクティビティ：（ラインナップ、ディオシット、トラストファール、人間知恵の輪、モンスター等） ●ふりかえりと共有									
授業計画 【第3回】	第3回 安全管理に関わる指導者の意識 ●安全管理と安全指導（野外活動における危険の種類を知る。） ●危険予知のトレーニング（KYT法）資料配布									
授業計画 【第4回】	第4回 自然体験活動の理念（座学） ●自然体験活動の必要性 ●指導者（伝える人）の必要性 ●自然体験活動と専門課程との関連									
授業計画 【第5回】	第5回 自然と人、社会や文化の関わり（プレゼンテーション） ●出身地の自然や文化を他者同士共有することで、その違いや共通することを知り、興味や理解を深める。（気候、産業、習慣、祭り、方言、etc） ●グループワーク ●発表 ●ふりかえりと共有									

授業計画 【第6回】	第6回 野外での自然体験活動 野外調理実習（すべての感覚を使った体験活動の理解、共同作業による役割の理解） ●野外調理献立作り ・野外調理に適したメニュー、材料、予算、調理法なども考える。 ●野外調理における衛生管理の実践 ●食事作り（グループ毎に調理）
授業計画 【第7回】	第7回 自然への導入～自然体験プログラムの実際（手法：ネイチャーゲーム） ●感性の体操（視覚、聴覚など、人が持つ感覚を意識する体験） ●マイツリー（視覚を閉ざし、他の感覚を研ぎ澄ます体験。またペアの信頼関係も築く） ●目隠しトレイル（視覚を閉ざし、他の感覚を研ぎ澄ます体験。） ●カモフラージュ（自然を意識して見ることへの気づきを体感する。） ●ふりかえりと共有
授業計画 【第8回】	第8回 人と自然環境保全の関係性（手法：プロジェクト・ワイルド） ●社会問題、環境問題を題材にした課題解決プログラム ●グループワークによる作業 ●グループ発表、それぞれの共有 ●課題に対してのふりかえり、説明（講師）
授業計画 【第9回】	第9回 野外での自然体験活動 基本技術（着火、刃物の取扱い、安全管理） 野外調理に必要な環境づくり ●調理場設営（テーブル、水まわり、ごみ処理など） ●火気の取り扱い（かまどづくり、火お越し、火の始末など） ●刃物の取り扱い（刃物の使用法、薪割りのポイント、薪の管理など）
授業計画 【第10回】	第10回 野外での自然体験活動 企画立案 ●アクティビティの企画立案（グループ毎、60分間程度の企画） ・グループ毎にネイチャーゲームをプログラム立案する。 ・ゲーム内容だけではなく、役割分担、安全管理などといった主催側として、全体のコーディネーションを意識する。
授業計画 【第11回】	第11回 野外での自然体験活動 指導運営の実践 ●アクティビティの実践実習（各班60分間の企画） グループ毎に企画したプログラムを指導側として実践する。 ★進行手順 ①挨拶、自己紹介、注意事項、安全トーク ②つかみ ③体験／ネイチャーゲーム実践 ④ふりかえり 実施者＝伝えたかったこと、できたことが実践、表現できたか。
授業計画 【第12回】	第12回 野外での自然体験活動 野営の基礎（テント設営、備品管理の必要性） ●テント設営（地面、角度、整地、周辺物、動線の安全などを考えた基本） ●宿泊体験（実際に宿泊し、より快適な空間づくりを目指す。） ●撤収や保管管理の方法を学ぶ。
授業計画 【第13回】	第13回 創造制作プログラム（ネイチャークラフト） ●自然物を使った創作活動を行う。 ●自然物それぞれにある特徴を知る、活かす。 ●体験活動の思い出となり、季節、場所などへの思いをつなぐ。 ●作品への思いの共有
授業計画 【第14回】	第14回 野外での自然体験活動～フィールド実践（リハートレッキング体験） ●実体験を通して、自然と関わるすばらしさを知る。 ●指導者としての意識 ・レクチャー、セフティートークなどの必要性 ・実施中の安全管理手法 ●ふりかえりと共有
授業計画 【第15回】	第15回 ふりかえりとまとめの重要性（気づきの共有） ●講義のすべてを記録写真をとおして全体をふりかえる。 ●本講義の必要性における個人の感想や意見を共有する。 ●講師のまとめ
授業の到達目標	・自然体験プログラムを通して、人と人、人と自然との関わりの大切さを理解する。また、社会的責任について理解する。 ・体験型プログラムを通し、自然体験活動が情操教育においての必要性を実感する。 ・指導者へ意識：自然体験の基礎知識、指導法、安全管理知識）などを習得する。 ・野外活動の技術を実践とおして習得する。 ・上記項目を通して、コミュニケーション力、協調性、また主体的に考える力を身につけ、人間力を持った社会人としての人間形成を目標とする。
学位授与の方針 (DP)との関連	1. 知識・理解を応用し活用する能力-(2)／2. 汎用的技能を応用し活用する能力-(1)／2. 汎用的技能を応用し活用する能力-(2)／3. 人間力、社会性、国際性の涵養-(1)／3. 人間力、社会性、国際性の涵養-(2)
授業時間外学習【予習】	【予習】 ・野外演習の物品や服装の準備は、安全管理面などからも重要であり、その必要性を理解、確認し備える。（30分） ・グループでの課題取り組みにおいて、効率よく進行できるように、グループ内で役割分担をし各自翌日に備える。（30分）
授業時間外学習【復習】	【復習】 ・日々の講義内容をふりかえり、疑問点などあれば翌日に質疑応答を設け、理解を深める。（30分）
課題に対する フィードバック	配布資料は、ファイリングをして講義内容を項目、時系列でふりかえられるように綴る。 レポート（ふりかえりと感想）はコピーをとり、評価の一部とする。 原本は、本人に返却し、自分の評価・変化を確認できるようにする。 体験実習においては、都度、自他による感想・意見・ふりかえりなどで評価、共有する。
評価方法・基準	・実践による技術習得（70点） ・自己評価（感想文）（30点）

テキスト	※以下のテキスト等から必要に応じた内容を配布するので購入の必要はない。 ・「自然体験活動指導者 安全管理ハンドブック」出版社：NPO法人自然体験活動推進協議会 価 格：一般価格：1,100円 発行日：2020年8月改訂 ・「プロジェクト・ワイルド=水辺編=」（非売品）著：一般財団法人 公園緑地管理財団
参考書	参考資料による引用と自主作成による配布資料。
備考	